

神田附木店

長谷川時雨

青空文庫

八月の暑い午後、九歳ここのつのあんぽんたんは古帳ふるちやうめんや面屋おぼのおき
 んちやんに連れられて、附木店つけぎだなのおきんちやんの叔母さんの家
 へいった。

附木店は浅草見附内みつけの郡代——日本橋区馬喰町ばくろちやうの裏と神田の
 柳原河原のこつちうらにあたっている。以前もとは、日本橋区の松島
 町とおなじ層の住民地で、多く願人坊主がんにんぼうずがいたのだそうだ。附
 木を造つて売つたから附木店の名がある。だが、あたしが連れて
 かれた時分はそんな場処ではなかった。表通りは何処どこか閑散とし
 て、古鉄屋ふるがねやや、かもじ屋や、鍛冶屋位かじやが目についたが、横町は
 小奇麗こぎれいだった。

おきんちゃんは一間の格子と一間の出窓をもった家の前で止まった。窓には簾すだれがあつて、前に細つこい植木が二、三本植わつていた。万年青おもとの芽分けが幾鉢も窓にならべてあつて、鉢には鰻うなぎの串くしをさし、赤い絹糸で万年青が行儀わるく育たないように輪を廻めぐらしてあつた。格子をあけると中の間の葭よし屏風びょうぶのかげから、

「きんぼうかい？」

と声をかけた女ひとがある。昼寝をしていたのだろう屏風の横からこつちをちよいとみて、きんぼうが一人でないので起上つた。

あたしはその人を立派な女だなあと思つて見とれていた。綺麗な女は幾いくたり人も見たが、なんだか大だい々だいしてみえたのだ。色の浅黒い大きな顔で、鼻がすつと高くつてしおのある眼だつた。剃そつ

た眉毛がまつ青だった。大きな赤い口で、齒は茄子色につやつやしていた。洗い髪がふつとふくれて、浴衣に博多の細帯をくいちがうように斜にまいていた。

その女が、団扇をもつ手で、葭屏風をかたよらせながら言つた。
「そのお子さんかい、きんぼう。」

十歳で、小柄で、ませている、清元の巧者な、町の小娘お金坊は、蝶々髷にさした花簪で頭を掻きながら、ええといった。あんぽんたんのことは話しずみの友達だったのだろう。

「やつちやん、てつたのねえ。」

その女は綺麗な、ちりめんの小枕に絹糸の房の垂れている、きじ塗りの船底枕をわきによせながら、花蕙の上へ座った

ままでいった。そばには大きな猫がいた。

あたしは猫が大好きいだ。おまけに化けそうな大猫で、ふとい尻つぽの長いだから、なおいやだった。それにもかかわらず、初対面のこの女の魅力と、ここの、せまい家の、八幡の藪しらずのような面白さに、おきんちゃんについて毎日通うようになってしまった。

おしよさん、とおきんちゃんは叔母さんのことを呼ぶ。その時分、好事家の間から、漸く一般的に流行しかけて来た、東流二絃琴のお師匠さんだったからだ。

ここで、すこしばかり知ったかぶりをいうと——これは九歳のあんぽんたんではなく、その後十年もの間にほんやりと知ったも

のだが——東流二絃琴は明治十七年ごろ世に流行しはじめた。家元とうしやろせんの藤舎芦船とうしやろせんといった加藤某は、世をすねて、風流文雅に反それた士である。高弟藤舎芦雪ろせつ、またなみなみの材ではなかった。この後継者が早折そうせつしなかったら、東流二絃琴はもつとひろまったであろうと惜まれていた。

芦船、芦雪は、歌曲ともに創作する力をもち、九十五曲を作りひろめた。この二絃琴の特長は粹いきひとがら上品なのである。荻江節おぎえぶしも一いち中ちゅうも河東かとうも、詩吟も、琴うたも、投節なげぶしも、あらゆるものの、よき節を巧みにとり入れて、しかも楽器相当に短章につくつたところに妙味があつた。それゆえ初心者には解せぬ、いうにいえぬうまみを出すことに苦心があつたわけである。で、あれもこ

れもと知りつくした、一流の手練てだれの人たちがならいはじめてひろめた。重おもに中年者以上の、生活に余裕のある、ものの音ねじめをあげつろう輩やからであつた。

よい衆の旦那、御内儀、権妻ごんさい——いき好みの、琴はどうも野暮くさいといった人が、これはいいと集まつた。明治に生れた楽器である。八雲琴が素もとで、竹琴ちつきん、一絃琴などが参酌されたものと思われる。九代目市川団十郎が『忠臣蔵』の大石内蔵之助くらのすけで、山科やましなの別れに「冬の恵めぐみ」を奏かなで、また四国旅行の旅土産たびづとに、「三津の眺め」の唱歌をつくつたので、一層評判になつた。宣伝にも抜目はなかつたのであろうが、通人つうじんである芦船は、求めずしてその道の人たちとも社交まじわりがあつたので、むしろ団十郎の方

が、新しい思いつきとして、または自分の好きな道を舞台にとり
入れたのかもしれない。片岡仁左衛門も大石をすると二絃琴を弾
いたが、調子がととのわないのが耳についた団十郎もしきりに調
子を直し直し、芝居が楽になったそうである。

二絃琴の調子は、糸がたった二筋だから単純でいて、そのくせ
複雑だ。一体二絃琴の響は一間へだてた方が丸味をおびてよいも
のだが、しかし、それは弾手の耳と、趣味の深さ浅さによるは論
をまたない。もともと小楽器で、小曲的なものに適しているのを、
大きな合奏曲の真似までしようとしたところにはころびがある。
最初はじめのうちの作曲や歌詞は、それをよく知ってつくられているが、
段々大物にしようとしたところに無理がある。

それは、芦船という人があまり器用すぎたのだろう。道楽で、

さるわかちよう

猿若町

はやしの芝居の囃子部屋にもいたりしたから、あの楽器へ、

長唄同様な囃子をつけた。

くろうと

黒人がきくと、あらゆる囃子の手が

もちいられてあつて舌をまくというが、そのよき伴奏者のために、

細い二本の絃は悲鳴をあげなければならなくなつて、二絃琴の真

のよさを失なつた嘆きがある。もとより、江戸情緒風物をたすけ

る、影の、軽い伴奏はあつてよい、私のいうのは鳴ものにまくし

たてられて、ヒステリカルにキンキンならされるのを惜むまでだ

きんぼうに連れられて、あんぽんたんが二絃琴のおしよさんの

家にいった時分には、もう家元芦船も芦雪も歿なくなつていた。直じきも

門もんに、芦ろ質しつ、芦ろ洲しゅう、芦ろ総そう、芦ろ寿す賀がらが残のこつていた。きんぼうのおばさんがその藤とう舎しや芦ろ寿す賀がなのである。

芦質さんという女が一番名望家おくさんらしかつた。青白い、神経質らしい、その仲間でのインテリ夫人おくさんだつた。薄い髪かみの毛を上品に、下の方へ丸めた束髪ふうつうで、白っぽい風通ふうつうか小紋こもんちりめんを着て、黒い帯をしめ、金歯きんばが光ひかつていた。斯波しばさんの御新造ごしんぞうといつて、浅草蔵前せんそうざんの方にいたから、もしかすると民政党の斯波氏しばのおうちの方だつたかもしれない。この女ひとが家元の格ひとをもつていたようだった。

日本橋伊勢町の方に芦洲さんは住んでいた。肥ふとつた黒い、立派りつぱな押出しのおかみさんだつた。大きい、勢いきいのいい店の内儀うちぎだつ

たのだろうと思う。いま、東流二絃琴の正統な弾手として奮闘しているのは、この人のお弟子さんたちにちがいない。ごく若い娘さんたちで、名取になっていた人のあつたことを思いだす。この派の弾き手なら、直門の正しい手法といえるだろう。ただ、私の子供の耳にも、やや余情のない、勢いのいい、ハッキリした芸風と思えた。

二絃琴は歌が——節がむずかしい。私はそんなふうにおぼえた。芦寿賀さんは節がやかましかった。曲をおぼえればそれでいいと
しなかつた。^{もつと}尤も、それは、きん坊とあんぽんただけで、あとの人は普通^{なみ}に、器楽の方を主にして教えはしたが、二人の子供は歌の方が三日、^{きん}琴の方は一日で自分から弾けてしまった。

あんぽんたんは、二絃琴がどんなものか、おぼろげながら知っていた。私の家にも芦船師が来たのだそうだが、そんな事は知っていない。ただ二絃琴という名は知らないが、おしよさんの家で見るとおなじ楽器が私の家にもあったのだ。父が時たまとりだして、安座あぐらをあぐらかいて、奏管ろかん（琴爪）で琴につけた譜面の星を、ウロウロ探しあてて弾いていた。大かた九世団十郎時代の、お弟子の一員でもあったのであろう。父はその琴を撫なでていった。

「これは芦船の形見だよ。」

後にわかったのは、薬研堀やげんぼりにいた妾ひとは、日本橋区堀留ほりどめの、杉の森に住んでいた堅田かただという鳴物師なりものしの妹だった。今でも二絃琴の鳴物は、鼓つづみの望月朴清ぼくせいの娘初子が総帥そうすいである。

おしよさんの家は格子戸の中が半間はんげんのたたきに二畳、となり
に窓の部屋、中の間の八畳にずっと戸棚があつて、一方の壁に簞た
笥んすがならび、その上に一ぱい細かいものが飾られてある。そのさ
きが長四畳ながよじようと台所のれん口がある。長四畳の縁は台所の後ま
でついていて鉢植ものの棚と、箱庭と金魚鉢の小庭がある。庭口
から女中さんが厠べこふじようへくるときは、外で下駄をぬいでくるほど小庭
の中はきれいで、浜でとれる小貝や小砂利が磨いてしいてある。
外は紺屋こうやの張り場だった。塀外に茄子なすの花が紫に咲いて、赤紫蘇しそ
のほが長く出ていた。

おもて
外の窓の部屋に、硝子戸ガラスの戸棚と小引出しがずっとならんでい

たが、おしよさんの連合つれあいの商しょう業ぎょうは眼鏡のわくとレンズを問屋へ入れるだけで、商品が量かさばらない商業だった。時々下職したじよくが注文をうけに来ていた。連合は開港場の横浜で手びろくやつていた、派手な商館相手の商人だったが、おしよさんのために逼ひっそ塞くしたということだった。らっこのトルコ型の帽子に、ラクダの頸巻くびきをして、外国人のような高い鼻をもった大きな人だったが、家にいる時は冬は糸織のねんねを着、夏は八端はったんの平ぐけを締めて、あんまり話はしないが細かく気のつく人だった。

おきんちゃんのうちも日蓮宗狂だが、此家ここの二人もそうだった。長四畳には帝釈たいしやく様さまの髭題目の軸がかかっている、お会式えしきの万燈まんどんの花傘の、長い竹についた紙の花が丸く輪にして上の方にか

かっている。軸の前の小机には、お燈とうみよう明あきらやら蠟燭ろうそく台やら、お花立もりものやらお供物の具ぐや、日朝上人にっちょううさまのお厨子ずしやら、種々さまざまな仏器が飾つてある。

おしよさんは、その部屋の、真中の柱に、長い柱鏡のかかつている前に、緋ひの毛せんを敷いて二面の二絃琴にむかつて座つてゐる。すべての小道具は、燦然さんぜんとみな磨かれて艶々つやつやしている。座ぶとんの傍に紫檀したんの煙草盆があつて、炉扇ろせんでよせられた富士山形の灰の上に香こがくゆつてゐる。二面の二絃琴の間には、漢方医がもたせてあるいた薬箱が、丁度両横から押出すようになっていて具合がよいので、薄い横とじの唄本うたほんをおくたためにおかれてあつた。六ツばかりある引出しには、絃いとや、小鋏こばさみや、懷中持ちの

薬入れに入れた、絃に塗る練ねりあぶら油などが入れてあつた。おじさんは、おしよさんのために、子供たちの琴の譜をさし示す銀の細い、消息子しょうそくしのような棒をつくらせてくれたりした。

おしよさんが髻たばをかきつけている巧うまさ——合せ鏡で、毛筋棒けすじのさきで丸鬚の根元なでを撫なでている時鬘かつらのように格好のいい頭を、あんぽんたんは凝じつと見つめていた。七日目なぬかめでも結ないたてよりきれいで格好もよかつた。私は夏の日、日盛りを稽古にゆくが、おしよさんの邪魔はしなかつた。おしよさんが寝ねていても、お客様があつても、髪結いさんが来ていても、お湯にいつてきてからでもお化粧がすんで、さあはじめましょうよといわれるまで、幾時間でも待てば待つほどおとなしくよろこんでいた。なぜなら、おしよさ

んのうちには、くさ双紙そうしの合巻ごうかんものが、本箱に幾つあつたかしかない。それがみんな、ちよいと何処どこにもあるようなものではなかつた。品も新らしいように奇麗で、みんな初版摺ずりだつたから、表紙絵の色刷ずりも美事だつた。

「ヤツちゃんは大事に丁寧に見るから。」

おしよさんは誰も他に人がいないと、秘蔵な『田舎源氏』まで出して見せてくれた。

「ヤツちゃん絵を見るばかりじゃない、ちゃんと読むんだからな。」

おじさんも同感であるといった。だから向うでも長い日のうちには、私は半日しようと邪魔にならない存在になって、ちよいと

した留守番もする。そこらにのそのそしていても、猫とおんなじ位の身うちあしらいだった。ある時おじさんがうんうんいつて押入れの葛籠つづらを引っぱりだして暑いのに何をはじめたんですとおしよさんが小言をいった。

古い錦にしきえ絵——芝居の絵を沢山に張った折おり本を、幾冊かだし

てくれた。私の家にもそれらはいくらかあつた。だが、ここのように系統だつて集めたものではない。夫婦は熱心に、これはなんという役者で誰の弟子、当り芸はなにで、こんな見み得をした時がよかつたとか、この時の着付けはこうだとか、誰の芸風はこうで彼はこうと、自分たちの興味も手つだつてよく話してくれた。

小伝馬町の古帳面屋の店みせぐち蔵の住居の二階で時折見かける、盲め

くらぼうさん
目で坊主頭のおばあさんが、おしよさんのうちにも時々来てとま
つていた。

紺ひとえはい麻の単物を着て、唐とうじゆす繻子の細い帯をキチンとしめてい
る盲目のお婆さんは、坊主頭でもいきな顔立ちだった。彼女は縁
側にちかい伊予簾いよすのかげに茵しとねを敷いていて——縁側には初夏なら
ば、すいすいと伸びた菖蒲しょうぶが、たつぷり筒形の花いけに入れて
あつたり、万年青おもとの鉢があつたり石せき菖しょうの鉢がおいてあつたり
した。おばあさんは長刀ながなたほおずきを鳴らすのが好きで、

「おツさん、あつしにも一本おくれよ。おやおや、こりやばかに
いいんだね。」

なんて、楽しんで、さきを切ってもらつて器用に鳴らした。丈たけが

二寸からある、長刀ながなたはおずきは、その時分でも一本一錢五厘から二錢位した。

その坊主頭の盲目のおばあさんが、キンボウとヤイチャンを前にならべて、錆さびた渋いので唄うたの素稽古すげいこをする。そばで聞いていて二絃琴の唄はすっかり暗唱しているのだ。おッさんの——おしよさんというのがそうきこえる——あすこんとは巧うまいね、好いい節ふしだなんていう。この坊さん昔はよつぽどそれ者だったのに違ちがいない。横網よこあみ河岸がしの備前家びぜんさま（今の安田公園の処めかけ）のお妾めかけお花さんが、毎日水門すいもんから屋根船を出して、今戸いまど河岸がしの市川権十郎かわさきやの家へいったのでお家騒動が起り、大崎の下邸しもやしきへ移転するとう噂うわさから、この坊さんもそんなような前身で、大崎の下邸には由縁ゆかり

のお墓もあるといった。

「御前様はお美しい方だったね、殿様が知事様におなりになつた時、御一所にお立たちになるので両国の店の前で、ちよいと御挨拶もうしあげた時見上げた事があるけれど、大きなお眼で、真つ黒なお髪に、そりやあ鼈べっこう甲こうの筭がいがテラテラして、白襟に、藍色あいの御紋附きだったけれど、目が覚めるようだった。」

とおしよさんもいった。両国の店つてなあにと聞くと、

「困ったねえ。」

と母娘おやこして笑った。おしよさんの家うちの軒燈けんとうには山崎やまざきとしてあるが、両国の並び茶屋の名も「山崎」だったと坊さんのおばあさんがいった。

あんぽんたんの好奇心は拡大ひろげられた。並び茶屋を出したおしよさんの若い時分はどんなだろう、盲目のおばあさんの、大名のお部屋さま時代はどんなだろう。そこに、くさ草紙ぞうしの世界が現われ綿絵の姿が髻ほうふつ髻ほうふつとした。田之助たのすけが動き、秀佳しゅうかが語る――

「ヘイ、お暑う、伝吉でございます。」

芝居茶屋の若い衆――といっても、もう頭の禿はげている伝さんが、いまど今戸のおせんべいを持ってくる。

「いい香においだね。」

おしよさんは袋をあけて見ながらいう、そこのおせんべいは、持つてくる時間をいって、頼んで焼いておいてもらうのだから、ほんとの親切よろこを悦よろこんですぐお茶を入れさせる。

「こんどはひとつどうぞ。」

芝居の話と伝さんの娘の話をして、さんざい袋をもらつてかえる。と、入れちがいに、

「へえ、伝さんが来ましたか？」

と女中さんと話ながら清^{せい}さんが入つて来た。伝さんとおなじの、黒い、麻の着物の尻^{しり}はしよりをおろして、手ぬぐいで、麻裏草履^はを穿^はいて来た足^{つま}前^{まさき}をはたいて、上つて来て、キチンとお辞儀をした。

「お暑うございますな。」

ちやけんじよう

茶^{ちや}献^{けん}上^{じよう}の帯の背にはさんだ白扇をとつて、煽^{あお}ぎながら、畳

んだ手拭の中をかえして頸^{くび}を拭^ふいた。小判形の団扇^{うちわ}が二本、今戸

名物、船佐ふなさの佃煮つくだにの折が出される。

「川崎屋までまいりましたから、これは私のわざとお土産みやげで。」

清さんの兄貴は、川崎屋権十郎の古い男衆だった。

こういう人たちは、中村座が閉場あけば中村座の何屋へ、新富座ならば何処どこと、三、四軒の芝居茶屋を助けもするが、歌舞伎の梅ばいり林りんとか三洲屋とか、一、二の茶屋で顔のうれている男衆たちだった。

「毎年ぜしん是真まことさんでござんすから、今年は河竹さんのお頼みいたしまして——」

それは団扇の絵のことだった。河竹さんとは、本所ほんじよに住む黙もく阿弥翁くあみおうちのことで、二人娘の妹さんが絵をかき、姉さんはお父さ

んの脚本のお手伝いをした。

おしよさんの家には、そうした団扇に虫がつかないように、細

い磨^{みがきだけ}竹に通して、室^{へや}の隅に三角に、鴨居^{かもい}へ渡してあつた。

「おしよさん、今年のお浴衣^{そろい}は、大層好^いいっておはなしですから、

夜芝居^よで、お浴衣^{ゆかた}見物でございますから、ひとつどうぞ、御見物

を——」

おしよさんは、今年も船で納涼の催しをと考えていたのをやめ

て、自慢の、その頃ではめずらしい素鼠^{すねずみじ}地の、藤の揃い浴衣で

見物することにきめる。

二絃琴^{ひろ}を拵めようとする気持ちと、おしよさんの派手ずきとか

ら、引幕^{ひきまく}を贈ることもあつた。藤の花の下に緋^ひの敷もの、二絃

琴を描いてあとは地紙じがみぢらしにして名とりの名を書いたりした。

お坊さんのお婆さんは、——伊藤いとうりようちよう凌潮という軍談読みの妻

君になって、おしよさんや、おしよさんの姉さんで、吉原で清元

で売った芸者——古帳面屋のお金ちやんの義母おつかさんや、末の妹の、

その時分には死んでしまつてたが、阪東ばんとう百代という踊りの師匠

のお母さんになつたのだ。おしよさんが若かつた時、太政官の参

内の馬車の腰かけの下へかくれていったと、やかましく噂うわさされた

事もあつたそうだ。お若い××様が御巡幸の時、百代と二人なら

んだ姿をお見詰めになつて——たしかにお目にとまつたのだが、

まだお齒黒をおつけになつて、お童様ちようさまだつたから——なんて話

もきくともなくきいた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神田附木店

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>